

# 紅葉狩

観世小次郎作

世阿弥作とも

季は	地は	シテ	ワキ	シテ	シテ
九月	信濃	鬼神	前に同じ	貴女	貴女

トモ	従者	ツレ	ワキ	侍女	侍女
			平維茂		

「時雨を急ぐ紅葉狩。く。ふかき山路を尋ねん。

シテ  
「是は此あたりに住む女にて候。

一同  
「げにやながらへて浮世に住むとも今は早。誰白雲  
の八重葎。茂れる宿の淋しきに。人こそ見えね秋  
の来て。庭の白菊うつろふ色も。うき身のたぐひ  
とあはれなり。

シテ  
「あまり淋しき夕まぐれ。しぐるゝ空をながめつゝ。  
四方の梢もなつかしさに。

下歌一同  
「伴ひ出づる道のべの。草葉の色も日にそひて。

上歌  
「下もみぢ。夜のまの露や染めつらん。く。朝の  
原は昨日より。色ふかき紅を。分け行くかたの山  
深み。げにや谷河に。風の掛けたる柵は。流れも  
やらぬもみぢ葉を。渡らば錦中絶えんと。まづ木  
の本に立ちよりて。四方の梢をながめて。暫く休  
み給へや。

ワキサシ  
「面白や頃は長月廿日あまり。四方の梢もいろくく

に。錦を色どる夕時雨。ぬれてや鹿のひとり鳴く。

声をしるべの狩場のすゑ。げに面白き景色かな。

トモ一声「明けぬとて。野辺より山に入る鹿の。跡吹き送る  
風の音に。駒の足並勇むなり。

歌  
「大丈夫が。弥猛心の梓弓。く。入る野の薄露分  
けて。行くへも遠き山陰の。しがきの道のさかし  
きに。落ちくる鹿の声すなり。風のゆくへも心せ  
よ。く。

ワキ詞  
「如何に誰がある。

トモ詞  
「御前に候。

ワキ  
「あの山陰にあたつて人影の見え候ふは。如何なる  
者ぞ名を尋ねて來り候へ。

トモ  
「畏つて候。名を尋ねて候へば。やごとなき上臈の。  
幕うちまはし屏風を立て。酒宴なかばと見えて候  
ふ程に。懇にたづねて候へば。名をば申さず。只  
さる御方とばかり申し候。

ワキ

「あら不思議や。此あたりにてさやうの人は思ひも  
よらず候。よし誰にてもあれ上膳の。道のほとり  
の紅葉狩。ことさら酒宴の半ならば。かたぐ乗  
打叶ふまじと。

地  
「馬よりおりて沓をぬぎ。く。道をへだてゝ山陰  
の。岩の崖路を過ぎ給ふ。心づかひぞたぐひなき。

く。

シテ

「げにや数ならぬ身ほどの山の奥に来て。人は知ら

じと打ち解けて。ひとりながむるもみぢ葉の。色  
見えけるか如何にせん。

ワキ  
「我は誰とも白真弓。たゞやごとなき御事に。恐れ  
て忍ぶばかりなり。

シテ  
「忍ぶもぢずり誰ぞとも。知らせ給はぬ道のべの。  
たよりに立ち寄り給へかし。

ワキ  
「思ひよらずの御事や。何しに我をば留め給ふべき  
と。さらぬやうにて過ぎ行けば。

シテ 「あら情なの御事や。一村雨の雨宿り。

ワキ 「一樹の陰に。

シテ 「立ちよりて。

地 「一河の流れを汲む酒を。いかでか見捨て給ふべ  
と。恥かしながらも。袂にすがりとゞむれば。さ  
すが岩木にあらざれば。心よわくも立ち帰る。所  
は山路の菊の酒。何かは苦しかるべき。

地クリ 「げにや虎渓を出でし古も。心ざしをば捨てがたき。

人の情の盃の。深き契のためしとかや。

シテサシ 「林間に酒をあたゝめて紅葉を焼くとかや。

地 「げに面白や所から。巖の上の苔筵。片敷く袖も紅  
葉衣の。くれなる深き顔ばせの。

ワキ 「此世の人とも思はれず。

地 「胸うち騒ぐばかりなり。

クセ 「さなきだに人心。乱るゝふしは竹の葉の。露ばか

りだに受けじとは。思ひしかども盃に。向へばか

はる心かな。されば仏も戒めの。道はさまぐ多  
けれど。ことに飲酒を破りなば。邪姪妄語も諸共  
に。乱心の花かづら。斯かる姿はまた世にも。た  
ぐひ嵐の山桜。よその見る目も如何ならん。

シテ  
「よしや思へば是とても。

地「前世のちぎり浅からぬ。深き情の色見えて。かゝ  
る折しも道のべの。草葉の露のかごとをも。かけ  
てぞ頼む行末を。契るもはかな打ちつけに。人の  
心も白雲の。立ちわづらへるけしきかな。かくて  
時刻も移りゆく。雲に嵐の声すなり。散るか正木  
の葛城の。神のちぎりの夜かけて。月の盃さす袖  
も。雪をめぐらす袂かな。堪へず紅葉。(中の舞)

シテ  
「堪へず紅葉青苔の地。

地「堪へず紅葉青苔の地。又これ涼風暮れゆく空に。  
雨うちそゝぐ夜嵐の。もの凄ましき山陰に。月待  
つほどのうたゝ寐に。かたしく袖も露深し。夢ば

し覚まし給ふなよ。く。  
(中入)

ワキ

「あらあさましや我ながら。無明の酒の醉心。まどろむ隙もなき内に。新なりける夢の告と。

地「驚く枕に雷火みだれ。天地もひゞき風遠近の。たづきも知らぬ山中に。覚束なしや恐ろしや。

歌

「不思議や今までありつる女。く。とりぐ化生の姿をあらはし。あるひは巖に火焰を放ち。または虚空に焰を降らし。咸陽宮の煙の内に。七尺の

屏風の上になほ。あまりて其たけ一丈の鬼神の。

角はかぼく眼は日月。面を向くべきやうぞなき。

ワキ「維茂すこしも騒がずして。

地「維茂すこしも騒ぎ給はず。南無や八幡大菩薩と。

心に念じ。剣を抜いて待ちかけ給へば。微塵になさんと飛んでかかるを。飛び違ひむずと組み。鬼神の真中さしとほす所を。頭をつかんで上らんとするを。切り払い給へば。剣に恐れて巖へ上るを。

引きおろし刺し通し。

忽ち鬼神を従へ給ふ。

威勢

の程こそ恐ろしけれ。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「説曲評釈第九輯」大和田建樹著